小品系般若経の菩薩の階位

勝 崎 裕 彦

小品系般若経の経文が、随次整然と作成されたとは考えられない。もちろん、各種の教説やそれぞれの主題のもとに展開する経文には、構成や組み立てにいろいろな趣向が凝らされ、教説の内容をより鮮明に伝えるための意匠が施されていることはいうまでもない。また、小品系統の各章品の繋がりやそれぞれの教説が少しく渾然としている部分もあり、伝えられる各種テキストの経文には、教説の飛躍や突然の挿入も見られることはすでに指摘されているところである。

そうした意味で、小品系般若経の教説内容の解釈には、各章品の展開過程の整理や経文の分析的理解が当然要求されることであろう。梶芳光運博士が小品系般若経の無叉羅訳『放光般若経』を基軸に整理された「般若経科判」は、支婁迦讖訳『道行般若経』系の小品系統をも包含したものであり、教説展開の段階付けた章別を試み、各章品の構成要素を分類・分析したものである。しかしこの梶芳博士の苦心の構築になる労作に対して、従来、その内容検証や批判に関しては、十

分にかつ具体的に試みられているとはいいがたい。ところで梶芳博士の章別・科判の基準は菩薩の段階的な発達階位によるわけであるから、ひとえにこの梶芳研究を裏付け、肉付けする目的の一作業として、表題のもとに小考を加えたい。

元来、小品系般若経は四階位の菩薩を説くとされる。平川彰博士も、小品系統の四種菩薩として考察されているが、「四種菩薩の階位をはじめて明らかにしたのは梶芳光運博士であると思うが、この考え方は山田龍城博士にも受けつがれている」と述べている。いわゆる鳩摩羅什訳『小品般若経』でいう無慳煩惱品第二十二の経文による、

世尊。若人於初發心菩薩隨喜。若於行六波羅蜜。若於阿毘跋致。

若於一生補處隨喜。是人爲得幾所福德。憍尸迦。須彌山王尙可稱量。是人隨喜福德不可稱量(大正八・五七五a)

という四階位の菩薩の教説であり、山田博士や初期の梶芳博士の研究では、『般若経』は四種菩薩に應じて、本文が四段階に進展し、菩薩の修行過程を説こうとしたものであるとい

う視点に立っていたのである。

新發意菩薩↓久發意菩薩↓不退転菩薩↓一生補処菩薩への四階位の進展によって、『般若經』の教説内容が順次次第して行くという、經文の構成要素の分析、あるいは經典の編纂様式の類推にかかわる方法であった。つまり、初期の梶芳博士の小品系般若經の区分は、たとえば、『小品般若經』を例に挙げて、

第一編

第一章、初品第一（或は須菩提品）

第二編

第二章、種性、釈提桓因品第二——佐助品第六

第三章、初發意、廻向品第七——歎淨品第九

第四章、久發意、不可思議品第十——相無相品第十三

第五章、阿毘跋致、相無相品第十三——阿惟越致相品第十六

第六章、一生補処、深功德品第十七——深心求菩提品第二十

第七章、繪撰、深心求菩提品第二十一——見阿闍佉品第二十五

というように、菩薩の四階位によって章別を企てられたのである。しかしこうした梶芳博士の営みは、後に大著『原始般若經の研究』によって熟考修正され、いわゆる〈新發意菩薩品〉↓〈久發意菩薩品〉↓〈不退転菩薩品〉の三階位よっての章別・科判へと大成されたのである。小品系統の本体の教説は、「第二編実相品」の中に組み込まれ、第一章品へ須菩提

品・第二章品〈天王品〉・第三章品〈種性品〉（筆者は、〈善男子善女人品〉と呼び換えている）・第四章品〈新發意菩薩品〉・第五章品〈久發意菩薩品〉・第六章品〈不退転菩薩品〉・第七章品〈繪撰品〉へと継承展開し、最終の増広章品である〈常啼菩薩品〉を別編としている。旧稿の四階位分科から新稿の三階位分科の経緯を細かく言及する余裕はここではないが、ただへ一生補処菩薩品をはずした意味合いと、『放光般若經』と『道行般若經』とが相共に、つまり小品系統のみならず大品系統をも共通に章別して、科判とした試みが重要なのである。

もちろん、こうした学説に対して平川博士は、「両博士の見方も理由のあることと思うが、しかし般若經で重要なことは、新学菩薩にたいして、般若波羅蜜とは何であるかを示す部分と、どこまで修行すれば不退菩薩と言いうるかを示す「不退菩薩」の内容の説明とであると考える」とし、さらに「したがって般若教徒がいま直ちに一生補処の位に達しようとは考えなかったであろう」と論述されている。たしかに梶芳博士もへ一生補処菩薩品は取りはずされたが、この平川説に対して、小品系般若經の經文の一つの大きな眼目は菩薩の階位を説くことであるという視点に立って、ここではまず階位による『般若經』の分析の妥当性を主張してみたい。

さて、すでに指摘したところであるが、小品系統の冒頭の

第一章品〈須菩提品〉において、菩薩の理念をはじめて説き明かした時、新発意菩薩と不退転菩薩の二種の菩薩を対比的に、対照的に説いている。いうところの『小品般若経』初品第一の教説によれば、般若波羅蜜において行ずる菩薩は、菩薩という名称にさえ執らわれることなく、「若菩薩聞是事。不驚不怖不沒不退。當知是菩薩畢竟住不退轉地。住無所住」(大正八・五三七c)とあるように、つねに不驚不怖不沒不退であるならば、すでに不退転の菩薩の階位 (avinivartaniya-bodhisattva-bhūmi) にあることになる。これに対して、悪知識 (pāpa-mitra) の誘い、つまり漢訳にいう「魔事」、魔の所行 (māra-karman) による驚怖沒退という怖畏に墮落してしまふ不安のあるものが新発意菩薩であり、大乘という乗り物に進み入ったばかりの菩薩大士 (nava-yāna-sampriṣṭhita-bodhiṣattva-mahasattva) であると説く。般若波羅蜜行に未熟な、まだ退転の可能性のある新発意菩薩と、もはや退転することのない不退転菩薩の二種・二様の菩薩を説示して教説が出発したのである。

こうした経文には、さまざまな比喩的な意味合いの教説が託されているが、善知識 (kalyāṇa-mitra) の導きで大乘に進み入る新発意菩薩と不退轉地に住する菩薩とのありようは、最終章品〈常啼菩薩品〉に説かれる薩陀波菴菩薩と曇無竭菩薩の登場に投影されているのである。新発意と不退転の二様の

菩薩が対比・対照されて教説される内容が、小品系般若経の原点であり、その意味で、平川博士が『般若経』の枢要として捉えられたところは正しいのである。元来、当初の『般若経』の出発点においては、菩薩の階位というような考え方はなかったはずである。

しかしながら、小品系統の経文の展開では、新発意菩薩と不退転菩薩の間に、やがて久しい修行が想定されるようになり、漸次段階的な菩薩の階梯が模索されるようになる。菩薩の修行実践が裏付けとなる久発意菩薩、久発心菩薩、久行菩薩の考え方が必然となるわけである。もちろん小品系統の教説の中で、久発意の概念が、古訳の『道行般若経』や支謙訳『大明度経』はもとより、『小品般若経』からサンスクリット文『八千頌般若経』等を含めて、十分に定まっているとはいいがたい側面のあることも否定できない。

ここでは〈久発意菩薩品〉の経文解釈を旨指して、小品系統に説かれる久発意菩薩をめぐる一考⁽⁷⁾したい。ちなみに〈久発意菩薩品〉とは、鳩摩羅什訳『小品般若経』の不可思議品第十・魔事品第十一・小如品第十二・相無相品第十三・船喻品第十四の五章品が相当する。久発意菩薩の教説へ導入される不可思議品第十から魔事品第十一へと推移する経文には、小品系統の構成上の基本形といってよい説示形式が示されている。

まず釈提桓因が、(1)「若人聞說深般若波羅蜜。受持讀誦如所說行。當知是人已曾多供養佛廣問其義。於過去諸佛。聞深般若波羅蜜。不驚不怖」(大正八・五五三c)と問い起こす冒頭の言葉に対して、舍利弗が(2)「世尊。若菩薩摩訶薩。能信解深般若波羅蜜。當知是菩薩如阿毘跋致。何以故。世尊。若人於過去世。不久行深般若波羅蜜。則不能信解」(大正八・五五三c)と述べて、仏の教えを要請する。仏は釈提桓因と舍利弗に向けて丁寧の説明し、(3)「若未受記菩薩。得聞深般若波羅蜜。當知是菩薩久發大乘心」(大正八・五五四a・b)と教え、深い般若波羅蜜を聞くことが久しく大乘に進み入ったことになる」と説く。ここで舍利弗が適切な譬喩を思いついて説き明かし、結局は(4)「佛言。善哉善哉舍利弗。汝所樂說者皆佛神力」(大正八・五五四c)とあるように、舍利弗は仏の讚辭を受け、その威神力を確認するのである。ここに至ってようやく須菩提が登場し、(5)「世尊。菩薩摩訶薩云何得具足修習行般若波羅蜜」(大正八・五五四c)と問い尋ねて、仏が菩薩道を久行するものの姿を説き示すことになる。つまり、(6)「世尊。般若波羅蜜如是誰能信解。須菩提。若久行菩薩道者。世尊。云何菩薩得名久行。須菩提。若菩薩行般若波羅蜜。不分別佛十力四無所畏。乃至不分別薩婆若。是名久行」(大正八・五五四c)という仏と須菩提の問答で示される。

紙数の都合からここまでを解釈すれば、(一)仏を中心に登場

する須菩提・舍利弗・釈提桓因の応答経文、(二)善哉善哉の讚辭と仏の威神力による承認(4)、(三)不驚不怖不退という繰り返しの反省(1)、(四)初品第一で新發意菩薩の姿が「是名發大乘心大莊嚴菩薩摩訶薩善知識」(大正八・五三八c)等と説明されていたことに対応(3)、などの特色を指摘できる。さらに(6)以降に続く不可思議品第十の経文は、善男子・善女人へ向けて甚深なる般若波羅蜜について、(7)「能受持讀誦般若波羅蜜乃至書寫」(大正八・五五五a)と勸奨し、その福德の多い旨を説き明かす。その際、悪魔の障害をよく克服することも説く。いうならば続く魔事品第十一は、この魔の所行の超克を強調し、魔事を離れて久行することをすすめる。また小如品第十二の最初に、(8)「須菩提。若人不受持讀誦修習般若波羅蜜。當知是人新發道意。少智少信不樂大法。爲魔所攝」(大正八・五五七b)と説き継がれているのは、久発意のあり方に対応し、(1)の教説を受けてのものとして解されよう。そして次の〈不退転菩薩品〉に入って大如品第十五で、(9)「須菩提。若菩薩於先佛所久修道行。成就善根乃能信解」(大正八・五六一c)とあるように、菩薩道の久行の功德が改めて確認される。

このような〈久発意菩薩品〉での説示形態は、〈須菩提品〉〈天王品〉〈善男子善女人品〉と次第する小品系般若經の教説構造とまったく同様のものである。また、〈善男子善女人品〉〈新發意菩薩品〉〈久発意菩薩品〉〈不退転菩薩品〉の四章品

を、小品系統のみならず大品系統を含めた『般若経』の網格と考えるならば、新発意→久発意→不退転へと段階的に次第する菩薩の階位と教説のあり方が重要であることはいうまでもない。とりわけ、菩薩が般若波羅蜜を修行・修習して行く教説と、その教説を受持・誦誦・書写して信仰をすすめて行く善男子・善女人の教説とが不可分に混成されているのが、たとえばこの〈久発意菩薩品〉でも明らかに指摘できる。

いづれにしても、梶芳博士の章別区分のように、新発意菩薩・久発意菩薩・不退転菩薩の三階位を想定するのが小品系統般若経であろう。一生補処菩薩という概念は、小品系統にはいまだ固まっていない、熟していないことは明らかである。

すなわち梶芳博士の三階位の発想の根底には、『仏本行集経』や『大事』(Mahāvastu)に説かれるところの、菩薩の修行の段階を四期に分ける四性行、四種行あるいは四菩薩行の考え方が配慮されている。つまり釈迦菩薩の修行の全行程を、①自性行 (prakṛti-caryā) ②願性行 (prañidhāna-caryā) ③順性行 (anuloma-caryā) ④転性行 (anivartana-caryā) の四種行に区分するものである。これを対応させて、『般若経』については、

- 一、種性品(善男善女品) 二、新発意菩薩品 prathamacittotpāda
三、久発意菩薩品 ciravānasamprasthita 四、不退転菩薩品 avinivartanīya

小品系統般若経の菩薩の階位(勝崎)

の四品に分けて、四種行と対照される大綱を認識されたのである。菩薩の階位については三階位であるが、いわゆる〈善男子善女人品〉を前段階に加えて、四品四分の骨格を定められたのである。ここでは、小品系統般若経における教説の展開の中で次第に想定されて行った菩薩の三階位説の再確認と、階位説による章別区分の妥当性、経文解析の重要性を評価しておきたい。

- 1 梶芳光運「大乘仏教の成立史的研究」『別出般若経科判』、七二九—一〇一八ページ参照。
 - 2 平川彰「初期大乘仏教の研究」I(著作集三)、四〇二—二〇六—二〇八ページ及び梶芳光運「般若経に現れたるその原始形態について——特に最近の諸原型説をめぐって」『小品般若経に於けるその構成要素について』(『東の智慧 西の思想』、一五—一六ページ、三一—三六—三七ページ)等参照。
 - 4 平川彰前掲書、四〇五ページ。
 - 5 拙論「小品系統般若経に説かれる菩薩」(『宗教研究』二九—二〇、二一—二二六ページ)及び「小品系統般若経の仏陀観」(『印仏研』四—一卷二号、二七—二七ページ)参照。
 - 6 岸一英「小品系統般若経における菩薩の階位の発達」(『印仏研』二四—二卷二号、一五〇—一五一—一五二ページ)参照。
 - 7 拙論「小品系統般若経〈久発意菩薩品〉について」(『宗教研究』二九五号、一八九—一九〇ページ)参照。
 - 8 關那峯多訳「仏本行集経」発心供養品第一(大正三・六五六—六五六)『Mahāvastu, ed. E. Senart, Vol. I, pp. 46—63.』
 - 9 梶芳光運「阿含経と般若経との比較」(『東の智慧 西の思想』二〇—二〇六ページ)等参照。
- 〈キーワード〉般若経、菩薩思想 (大正大学講師)